

多神多仏（「カミ」）のくに・奈良から②

—父から息子に受け継がれた奈良の文化遺伝子—

EURO-NARASIA Q vol. 13 より続き

〔承前 奈良から世界に向かう文化遺伝子〕

米国聖公会から派遣された伝道師アイザック・ドーマンは、明治21年（1888）奈良に着任し、前年開校した「奈良英和学校」の教師となつて、足かけ8年間奈良で暮らした。その奈良の地で生まれたのが、後に米国の外交官となるユージーン・ホフマン・ドーマンだった。

父・アイザックは、息子・ユージーンが神戸の領事館に赴任する前年の大正3年（1914）『A MISSIONARY'S LIFE IN THE LAND OF THE GODS(神国ニ於ケル一伝道師ノ生活)』という自伝体の書物を著した。その冒頭に、「お飾り外交官」とのやりとりが、次のような場面として現れる。

「結局のところ、私はこの国民が全く理解できない。おそらく今後、彼らを理解できないでしょうね」

「あなたは一度でも、彼らの『魂』を考察したことがあるでしょうか」

前者が外交官の発言で、後者がアイザックの科白なのだが、実際には言葉として発せられてはいない。対話の相手が外交官（a diplomat）でなく伝道師（a missionary）であったなら問うたであろう言葉である、そうアイザックは記した。そして、こうも言った。

「日本人の表面に浮遊するものではなく、根底にある本質(魂)を見極めよ」

この一伝道師（a missionary）への言葉は、ひとまずアイザック自身に向けられ、父の心身を貫通して、一外交官（a diplomat）となった息子—「お飾り外交官」ではなく「専門外交官」、とりわけ「ジャパン・スペシャリスト」となった息子—に伝えられるべきものだったのではないか。この父のメッセージに応えるように、息子・ユージーンは日本の本質を見つめ続け、生涯にわたって「日米両国間の戦争回避に、少しでも役に立ちたい」との初志を貫いたのである。

アイザック・ドーマンは、日本人の清潔さや明るさ、日本の風景や文化・芸術・古建築を、こよなく愛した。とくに奈良公園周辺の景色・文物については、これほど多くの感動を呼び起こす地は世界のどこにもない、そう絶賛していた。アイザックは宗教家・教育者であると同時に—あるいは、それ以上に—日本美術（画）史の研究者であり、優れた審美眼と表現力の持ち主であった。

そのような父の下で、ユージーンは多感な幼少年期を送ったのである。また、1歳頃の米田庄太郎との交流（EURO-NARASIA Q vol. 13参照）は、確かにユージーンの知的記憶として残ったとは言えないが、意識的に日本人に触れた、最初の「皮膚感覚」として、心身の内奥に深く刻まれたことは容易に想像できる。

遠い昔から、平城京の時代を経て今日まで、極東からヨーロッパに届く多岐広範なルート（「ナラジア・ロード」）を通して、さまざま

文物や技術が奈良にもたらされた。一方、このルートが「交流」の道であるなら、逆走してユーラシア各地に広がった奈良的な要素が一目立つたかたちで存在しなければならぬ。

アイザックとユージーンのパドマン父子は、そのレガシーの極めて稀有な一痕跡と考えられる。かりにアイザックからユージーンに受け継がれた「親日（奈良）」の情感を、「奈良的文化遺伝子」とでも名づければ、その遺伝情報を運んだゲノムは何であったのか。

本論は、その本格的な研究に先駆けて、父・アイザックが最初の赴任地となった奈良一息子・ユージーンにとっては出生地であり、人生最初の5年を過ごした土地で、何を見て・何を感じ・そこから「日本」という国をどのように捉えたかについて、主に『A MISSIONARY'S LIFE IN THE LAND OF THE GODS』の記述を通じて追跡する。

本号では、まず、アイザックの日本に対する評価について、奈良赴任前後の明治中期を中心とした、その印象・体験の記述を追うこととする。以下の引用部は、左記2を参考にしつつも、故あって直接1からの拙訳とした。また、掲載誌の性格を考慮し、引用箇所への指示は略す。いずれも、諒とされたい。

1. Dooman, Isaac. A MISSIONARY'S LIFE IN THE LAND OF THE GODS, Boston, Richard G. Badger, 1914 (以下、『原著書』)
2. アイザック・ドーマン著／恩智理訳『神國ニ於ケル一伝道師ノ生活』(2012) 阿吽社 (以下、『日本語訳書』)

1. 来日までのアイザック・ドーマン

1888年に来日するまでのアイザック・ドーマン30有余年の半生については、次号で詳細に追跡する。ここでは、アイザックの日本や奈良へのついての「まなざし」を探る上で必要な最小限の論者の推測も交えて一情報のみを共有しておきたい。

・アイザック・ドーマンは、1857年12月21日、現在のイラン・西アーザルバイジャン州・オルミエ市に、ネストリウス派クリスチャンとして生まれた、アルメニア人。

異説としては、生地・タブリーズ・トビリシ(ティフリス)・アラト山からそう遠くないところ、民族の出自…ペルシア人、あるいはペルシア系アルメニア人。

・青少年期、伝道団の影響でネストリウス派から長老派教会に転向、1882年ころ、その教団から教育留学として米国に派遣。

長老会派伝道会で、当地の布教に必要な教育を受けていた可能性が高く、現地での「教育」や「広報」の仕事をしていたと思われる。当初の留学先は、長老教会派にゆかりのあるフランスであったかもしれない。

・派遣された米国で、自分本来の信仰スタイルに近い聖公会派に移り、1882年ゼネラル神学校に入学。

この神学校の5年間で、広範な分野でかなり高度な教育を受けたものと思われる。

・1886年、ゼネラル神学校を卒業。当初は「故国」ペルシアでの伝道を準備していた。

・1887年、最終的にはホフマン長老の手配によって、日本伝道の命を受け、故国・ペルシアを経由し、日本に向かう。

このホフマン長老が当時ゼネラル神学校校長であったユーージン・オーガスタス・ホフマン師(日本(奈良)で授かった最初の息子・ユーージン・ホフマンの名の由来と思われる。

ここで改めて確認しておきたいのは、アイザック・ドーマンが、民族的に「非西洋人」であるという「事実」だ。詳しくは次号に譲るが、本人の自覚とは無関係に、同じ伝道師仲間(西洋人)ですら「主に見た目などから」「アジアを理解できるように生まれついている」と認識されていた。アイザックが、日本(人)に受け容れられ、尊敬かつ親近感を持って迎えられたのも、まさにその「アジア的」なるが故と見られていたのだ。これは、父・アイザックのみならず、息子・ユーージンにも終生付き纏う「先入見(偏見)」であった。このことは、アイザックの日本や奈良への「まなざし」を探る上でも、留意しておきたい。

2. 日本の自然／風景／景観

ニューヨークを出港後は、イギリス・フランス・ドイツ・オーストリア・ロシア・トルコ・エジプト・シンガポール・香港で船を乗り換えた(…)。香港を出て6日目、遠くに陸地が見えた。(…)すばらしい富士山、この地球上で富士山ほど画家や詩人に靈感を与えてきた場所がほかにあるだろうか、姿や形を変化させ続ける富士山の姿は、常に新しい空中楼阁のように見える(…)。7日目の朝、私たち一家は、横浜の港に着(いた)。

〔横浜から東京への1時間ほどの乗車で感じたが〕自然景観の美しさが、もう一つの日本の特徴だ。(1時間ほどの間に)天空は、あらゆる形状の雲とその組み合わせによって装飾されていた。そし

て、それらの雲の一つ一つが、上る太陽で真っ赤に染められていた。その光景は肉眼で見える、最もすばらしいものの一つであった。

〔日本に〕南から流れ込む大気は、膨張する性質を持った暖気で、北からの大気はオーロラの色合いが強い冷気である。このように〔日本の上空に流入する〕両極端な大気が、〔日本の空という〕巨大な円形劇場で、あらゆる種類のアトラクションを披露するのだ。(…)この光景は、筆舌に尽くし難い。(「そもそも」神が多様かつ明白なカタチで顕現される、その荘嚴な瞬間にあって、神の絶対的な偉大さを楽しむ最上の方法は、沈黙である。

日本ほど海岸線が美しく、無数に湾岸があり、変化に富む島嶼が点在し、しかもそれが緑に包まれている。このように光景が目の前で次々に移り変わる国は、たぶん世界のどこにもないだろう。

3. 日本社会のありよう

安定した気候と、日本人の気性や嗜好が相俟って、日本のあらゆる品々は可能な限り簡素で軽いものになっている。

日本は長い歴史を持つ先進国家にはかなわないところがある。知識や能力の部分はまだまだ中国が先輩格だ。文化の洗練さ生活の規律正しく安定した生活という点では、ペルシアに劣る。食事や料理についてはインドやトルコが上だ。しかし身なりの清潔さと陽気さに関しては、どのアジア諸国も、あるいは西洋諸国の多くも、日本にはかなわないだろう。

私はこの世界―日本―をゆっくりとではあるが、しかし着実に理解し始めていた。日本に親しみ、学び、知識を高め、その上で最終的に大木、すなわちキリスト教に日本を接ぎ木するのが私に与えられ

た任務なのである。

商人・旅行者・画家・科学者は〔…〕絶え間なく変化化する日本や日本人の暮らしに、夢中になるだろう。そして、この島の王国と住人の永遠の繁栄を讃えるだろう。〔しかし〕外交を職業とし、束の間に過ぎない外見の魅力に惹かれられない人は、日本や日本人の印象が、かなり悪いものになっているのではないかと思っている。

横浜駅で、初めてたくさんの日本人を目にし、2つのことを好ましいと感じた。第1に身なりが清潔なこと、第2はその底抜けの陽気さである。〔これら関しては〕日本人と他の東洋人とは明らかに違っている。

「神の御国」※での最初の数日間は、楽しい経験がたくさんあった。だが、その後日本の嫌な面にも見せつけられた。それは庶民に対する役人の振る舞いだ。ロンドンやニューヨークの警官と東京や横浜の警官を比べると、その態度は明白に違っている。私には、日本の警官が「有能」だとは思えない。〔…〕他国に比べ、日本の犯罪が少ないのは、遵法が日本人の本能として遺伝してきたからではないかと思う。〔…〕三等車の乗客に対する駅員の態度も無礼極まりない。これが警察の横柄さとともに、専制的な〔日本〕政府の要素を示している。

※Kami-no-Mikuni (神の御国) が、the Land of the Gods に意味にあてられている。キリスト教宣教師(伝道師)であるアイザックが複数形のGodsのような心境で使用したのが、興味深い。

何度心で、こうつぶやいたことか。「日本の〔諸外国への〕言動がいかに丁寧であろうが、多数の一般国民をきちんと正當に扱わないかぎり、先進国の仲間入りなどできっこない!」〔…〕日本〔人〕が自国民を差別し、平等に尊重できないのなら、同じようなことを日本

〔人〕にする外国人を非難できないじゃないか!」と。

〔日本〕政府が国民に厳しく対処することを弁解する声もある。〔…〕日本はまだ幼児期にあつて、アメリカのように、自由を尊重する〔成熟した〕国の法律を、そのまま適用することはできない」と。〔…〕しかし、今の日本は幼児期にあると言えるだろうか。〔…〕仮にそうだとしても、自由に専制が混じったなら、みんなが満足する新しい政治体制を生み出すことなど不可能だ。これまで、そんなことに成功した国は一つもない。この〔歴史的にみて〕当然の事実を、見過ごしてはならない。日本も例外ではないのだ。

4. 日本人の性格／特徴

日本では男女ともに〔…〕幸せそうである。その華奢な身体は、苦勞・退屈・心配・病氣などを一切抱えていないように見える。みんな、にこにこして笑っている。客が人力車夫に定められた料金を渡しただけで、二人とも笑い始める。〔…〕実際に駅で見た光景だが、誰かがうっかり他人の身体に当たったり、足を踏んでしまったときも、やはり同じような喜劇が繰り広げられた。その夜、東京で聖書の研究会に出席した。そのときも同じようなことが起こった。〔…〕最初のは、日本人は重厚さや真剣さが欠落しているのかと、可愛そうに思ってしまったほどだ。〔…〕日本人の並外れた陽気さは、いくつかの条件が幸運なかたちで重なったからだ。私は思う。その条件には物理的・精神的なものの両方が含まれようが、ともあれ外国人には推測も説明もできない類いのものなのだ。

もう一つ、好印象を与える日本人の特徴〔は〕開放的でおしゃべり好きなことだ。〔…〕日本人は本能的に、どんな会話からでも退屈さを取り除く境界線を知っているかのようだ。〔…〕ほとんどの日本人

は、同じような質問や話題を好むということが、すぐに分かった。だから「…」私は、自分の年・家族の年・国籍・職業などを、自分から進んで話すようになった。

5. 日本人のチャレンジ精神―奈良での体験―

ある奈良の農夫が神戸に行ったときのことだ。市場を歩いていると、大きな梨が盛られていて、「一つ十銭」と書かれていた。買って皮を剥いて食べてみると、とてもおいしかった。農民はその梨の生産地を尋ね、すぐに列車に乗ってその地に向かった。そこで植えてから何年で実がなるか、またどれほど実がなるかなど、梨に関する詳細を調べあげた。そのうち、自分の水田を梨園に変えようと思うようになった。水田は先祖代々のもので、忘れ難い思い出があったのだが、最終的には梨園とすることにした。この農夫は強い決意のもとに〔新たな〕事業を構想し、成功して一財産を築いた。その結果、誰もが彼の成功例（！）に倣うようになった。

そのとき、私は親しい知人に「この〔奈良〕県の人は米を食べるのをやめ、梨だけ食べて生きていくのでしょうか」と尋ねた。

「まさか、そんなこと」と知人は言下に否定した。「どうして、そういう突飛なことを考えるのですか。梨を育てるほうが水稲耕作より儲かるから、梨畑を作ろうとするだけです。梨が売れなくなれば、別のものを栽培して、とにかく土地を活用しようとするのです。伝統だの過去のしがらみだのにとらわれていては、未来への進歩は阻害されます」

これは、これまで50年間日本を突き動かしてきた国内の動向を誇張するために「でっちあげた」話ではない。これは歴史的できごとな

のだ。つまり、日本がその複雑な活動のどの領域においても大きな成功を収める原因になったと考えるべき正にその秘密―あるいは多くの秘密の一つ―がここに隠されている。

to be continued...